

KIHS



NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所
Konan Institute of Human Sciences



2004
Vol. 04

甲南大学人間科学研究所の今年度の研究活動のテーマは、7つのテーマのうち「トラウマ概念の再吟味」です。近年、「トラウマ」という言葉をさまざまな場面で耳にします。

「トラウマ」は、心が外部から傷つけられるという意味でとらえられ、安易に用いられる傾向にあります。

しかしトラウマの本質は、受けとめきれずに冷凍保存されていた記憶が、思いがけず蘇り襲ってくる場所にあり、単純な「傷」のイメージでは捉えきれないものです。

研究所では、有効なトラウマ臨床のあり方を探るべく、昨年より研究会を重ね、この夏、「埋葬と亡霊」という副題とともに公開シンポジウムを行いました。

個人の心への暴力的作用から、社会全体が受ける傷まで、幅広い現象を含んだ概念の核心を、哲学、精神医学、臨床心理学といった多角的な視点から再吟味しました。

学内外から多くの方に参加していただき、充実したシンポジウムとなりました。

今年度末には、その成果が本のかたちで出版されます。どうぞご期待ください。

現在、来年度の公開シンポジウムに向けて動き出しています。テーマは「感性の変容」です。

自分や他人、周囲の世界を捉えるさいに発揮する感覚の能力と性質は、めまぐるしく変わる環境の中でどのように変容するのでしょうか？それとも変容しないのでしょうか？そこで切り口にするのが「花」。

人間は、古今東西、花の美しさを愛で、装飾や文様などに用いてきました。

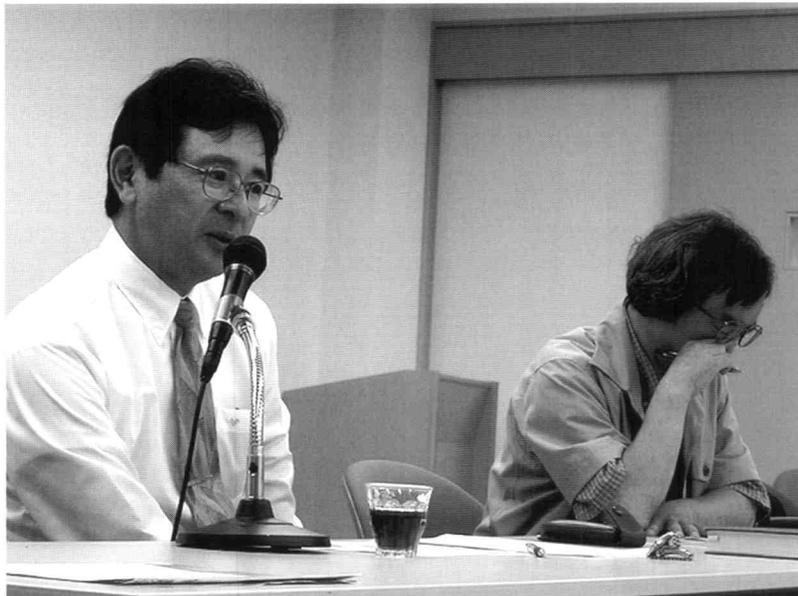
けれども、その美しさは次世代を産むためのものであって、花自らは枯れ行きます。

つまり、花の美しさには生々しい「生と死」が宿っているのです。

このような花の隠し持つ生命性は、人間の生命性、感受性とも深く通じていると考えられるでしょう。

今回、ニュースレター第4号では、新しいテーマについて行った最新の研究会の様態をレポートします。

秘すれば花なり 一世阿弥の能楽論



講師：金関猛(岡山大学/ドイツ文学)

司会：斧谷彌守一

(甲南大学/言語論・イメージ論・文学論)

日時：2004年7月9日(金)

場所：18号館3階 講演室

花

は日本人の感性・美意識の中心に位置していると言えます。その証拠に、万葉のころから歌われ、描かれ、活けられ、そして論じられてきました。たとえば「花」という言葉は、室町時代に書かれた芸能論の嚆矢『風姿花伝』『至花道』『花鏡』等のタイトルに見られます。これらは観阿弥が口述したものを、その子世阿弥が記録し推敲した秘伝の演劇理論書です。そこでは「秘すれば花なり、秘さずば花なるべからずとなり」と、花がメタファーとなって能の極意が説かれます。今回は講師に金関猛氏を迎え、能楽論における花について論じていただきました。

能では、舞台と客席とが同じ外気と光で包まれ観客に開かれています。また囃子方や地謡、後見などの進行役は、演者と観客の両方の立場にあることによって両者を繋いでいます。このように能は、客席という「日常」と地続きでありながらも、極限まで抽象化された動きや台詞まわしによって虚構の物語という「非日常」を一その虚構性を露わにしつつ展開するのです。では秘密を隠すには相応しくない空間で、どう「秘す」れば「花」が咲き開くのでしょうか。

まず『風姿花伝』では、花とは「おもしろき」「めづらしき」こと、つまり見る人に感興を引き起こす効果とされています。たしかに、なにかを隠匿することで神秘性や趣が生じます。しかし世阿弥はわざとらしい戦略を否定し、むしろなにかを隠していることは見破られてはならず、面白いこと珍しいことがありそうだという期待感をもたせてはならないとします。つまり明け透けな空間において「隠蔽を隠蔽する」という二重の秘匿が求められるのです。それによって観客は、それが花であることを意識する間もなく、花の面白さ珍しさを受け入れてしまうというのです。

ただし事はそう単純ではありません。一見するとなにも隠す余地のない空間であるために、観客の想念は舞台上の僅かに遮蔽された空

間へと向かい、より一層、そこに微かな秘密をかき取ります。また、能面は縁者の顔の一部しか覆っていないため、観客の想像力は触発され、能面の裏側へと掻き立てられます。つまり能舞台ではあからさまに「見るものと見られるものとの関係」が生じ、同時に「隠していることと隠されていること」がせめぎ合っているのです。そのような立体的・重層的な状況においてこそ花が咲くのです。

金関氏はさらに、「秘すれば花」の真意を昔男への恋慕を描いた夢幻能『井筒』の戯曲に見出そうとされました。世阿弥自身はこの戯曲こそ直截な恋が純化された理想的表現と考えています。しかし金関氏は、若く優美なシテ「若女(小面)」に秘匿されているもの、すなわち「般若」や「老女」といった醜悪な部分をあぶり出します。女の恋心は、死んでなお夢の中で男を見る、つまり契ることを願う強烈な欲望や、移り気であった男への執念や怨念に裏打ちされているのです。そして、そのような秘されるものがあるからこそ、「若女」はよりすぐれた「花」たりえるのです。以上のような踏み込んだ考察は、世阿弥の理論書を表面的に追っている限りは不可能です。しかし金関氏によると、作品の上演を直接経験すれば、秘伝の書におけるこの沈黙こそが世阿弥の戦略であり「秘すれば花」の真意であると想定できるのです。氏の指摘は新鮮であり、世阿弥の言葉が600年もの月日を経てこの研究会において吟味され、いわば一時の「花」が咲かせられたといえるでしょう。フロアからは、芸術の神秘性を単純に謳歌しえない現代人にとってそのような経験は難しいという意見も出ましたが、「花」というメタファーで語られている事柄は能楽だけに限られたことではなく、芸能・芸術一般について、さらに生命全体について普遍的なことと考えられます。われわれは、実際に咲く「花」はもちろんのこと、秘されるがゆえに現象しえる万象について頭と五感で認識できる、あるいは、認識すべきでしょう。

花の感性・感性の花



講師：田中修（甲南大学／植物生理学）
浅野房世（兵庫県立大学・
兵庫県立淡路景観園芸学校／園芸療法）
司会：斧谷彌守一
（甲南大学／言語論・イメージ論・文学論）
日時：2004年10月22日（金）
場所：18号館3階 講演室

今

回は、植物生理学がご専門の田中修氏と、昨年度、園芸療法研修会の講師をお願いした浅野房世氏をお招きし、ミニ・シンポジウムを開催しました。

まず、田中氏に「花たちの感性」と題し、身近にある花々の命の営みを紹介していただきました。植物の多くが春や秋に花を咲かせ種を作るのは、夏の暑さや冬の寒さを種の姿でしのぐためです。植物はどのようにして季節を前もって知るのでしょうか。彼らが手がかりになっているのは夜の長さであり、植物の葉は暗くなってから何時間経ったかを15分の誤差で正確に計ることができるそうです。また、子孫を残すためには、同じ種類の植物がみな同時に花を咲かせて他の株と交配する必要があります。花は季節だけではなく時間帯も「打ち合わせて」咲いていることになります。花そのものも、虫を誘い込んだり、近親交配を防いだりする巧妙さを持っています。さらに、花の色は虫を誘い込むだけではなく、有害な活性酸素を生み出す紫外線から植物を守るといった重要な働きをしているのです。

植物は、芽を持っているうちはどこまでも伸びていきます。しかし、一旦つぼみをつくると、伸びることをやめ「命がけで」花を咲かせ、子孫を残すために種を作り、生涯を終えます。無事に種を作り終えるまで、植物には「一切のゆとりはない」のです。身近な植物にもそんな命の営みがあることを教えていただきました。

続いて、浅野氏から「自然の癒し、花からの癒し」というタイトルで、園芸療法、及び園芸療法士の養成とその活躍する場について講じていただきました。Health（健康）もHealing（癒し）も共にラテン語のHolos（Whole:「全体」の意）を語源としており、Healthとは全体的・本質的に元気であること、Healingとはその人が本来持っている能力や力が、何らかの外圧によって歪められたとき、その歪みを修整するプロセスと考えられます。園芸療法には、五感によって植物を觀賞する

ことと、植物を実際に育てることが含まれます。我々は、これらを日頃から何気なく取り入れて、身体・こころ・精神の全体的・本質的な健康を保っています。それが自分一人ではできなくなってしまっている人を手助けし、治療に役立てるのが園芸療法です。そこでは、植物のいのちをクライアントの魂に承応させ、クライアントが生に向かって再び歩み出すことを目指しています。

園芸療法には、運動機能の維持・向上といった身体的効果、観察力・判断力が高まる知的効果、達成感・満足感を味わったり植物に合わせて自己抑制をしたりすることによる感情的効果、グループ活動による社会的効果などもあり、高齢者施設や医療施設、子どもの施設などでの幅広い活用が考えられています。兵庫県立淡路景観園芸学校では、充実した設備とアメリカの大学（園芸療法コース）と同じカリキュラムをもって、園芸療法士を養成しています。その様子が写真で紹介され、浅野氏の監修で、関西労災病院に今年5月にオープンした「癒しの庭」も併せて写真で紹介されました。

最後のディスカッションでは、植物と人間の関わりをめぐって議論がなされました。田中氏は、植物は人間と違って「動けない」のではなく様々な工夫によって「動かなくても生きていける」と捉えています。自給自足できる植物はおそらく人間のことを何とも思っていないでしょう。しかしながら、植物の生活の場を変えることができるのは人間であることなどから、やはり植物にとっても人間はパートナーと言えます。浅野氏からは、植物を介在させながら自分の内的世界を表現するという意味で、園芸療法と俳句・短歌の類似性が指摘されました。季語や二十四節季を通じて、少し早めの季節の気配を感じ取る日本人の感性は、園芸療法とも非常に親密な関わりを持っています。今後、研究会等を重ねていく中で「花」をテーマに様々な分野からの考察がなされていきますが、そのヒントが多く呈示されたミニ・シンポジウムでした。



※これまでの活動

2004年4月～10月

研究会

- 第11回 虐待によるトラウマと世代間連鎖
日 時：2004年5月7日(金)
講 師：棚瀬 一代(京都女子大学/臨床心理学)
- 第12回 解離と外傷—精神分析的理解と治療—
日 時：2004年6月25日(金)
講 師：細澤 仁(兵庫教育大学/
精神分析・精神医学・臨床心理学)
- 第13回 グローバリゼーション、ナショナリズム、
「心のノート」
日 時：2004年7月2日(金)
講 師：港道 隆(甲南大学/哲学)
- 第14回 秘すれば花なり—世阿弥の能楽論—
日 時：2004年7月9日(金)
講 師：金関 猛(岡山大学/ドイツ文学)
- 第15回 ミニ・シンポジウム 花の感性・感性の花
日 時：2004年10月22日(金)
講 師：田中 修(甲南大学/植物生理学)
浅野 房世(兵庫県立大学・淡路景観
園芸学校/園芸療法)

公開シンポジウム

- 第5回 トラウマ概念の再吟味—埋葬と亡霊—
日 時：2004年7月25日(日) 1:00pm～5:30pm
場 所：甲南大学 甲友会館
共 催：兵庫県こころのケアセンター
シンポジスト：加藤 寛(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
白川 美也子(国立療養所天竜病院/精神医学)
高橋 哲哉(東京大学/哲学)
森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
指定討論者：中井 久夫(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
港道 隆(甲南大学/哲学)
司 会：横山 博(甲南大学/精神医学・臨床心理学)

※これからの活動

2004年11月～

出版事業

- シリーズ〈心の危機と臨床の知〉5
『埋葬と亡霊—トラウマ概念の再吟味』
編 者：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
2005年2月頃、人文書院より出版予定

公開シンポジウム

- 第6回 感性の変容(仮題)
日 時：2005年7月24日(日)(開催時間、場所は未定)
シンポジスト：岩城 見一(京都大学/美学・芸術学)
高阪 薫(甲南大学/近代日本文学)
田中 修(甲南大学/植物生理学)
浅野 房世(兵庫県立大学・淡路景観園芸学校/
園芸療法)
川戸 圓(大阪女子大学/臨床心理学・ユング心理学)
指定討論者：加藤 清(隈病院/精神医学)
斧谷 彌守一(甲南大学/言語論・文学論)
司 会：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)



【編集後記】

KIHS研究会にはじめて理系の研究者が登場しました。ミニ・シンポジウムでお話くださった理工学部の田中修先生です。同じ花を見ても、感じることはこれほど違うのか!と、わたしたちには驚きの連続でした。「人間」に対しても、ずいぶん違う考えや思いをお持ちのようです。今後いろいろ教えていただきたいと楽しみにしています。さらにさまざまな分野の研究者が参加する予定の「感性の変容」のテーマ。共同研究からどんな「花」が咲くでしょうか。これからのKIHSの展開を、どうぞご期待ください。